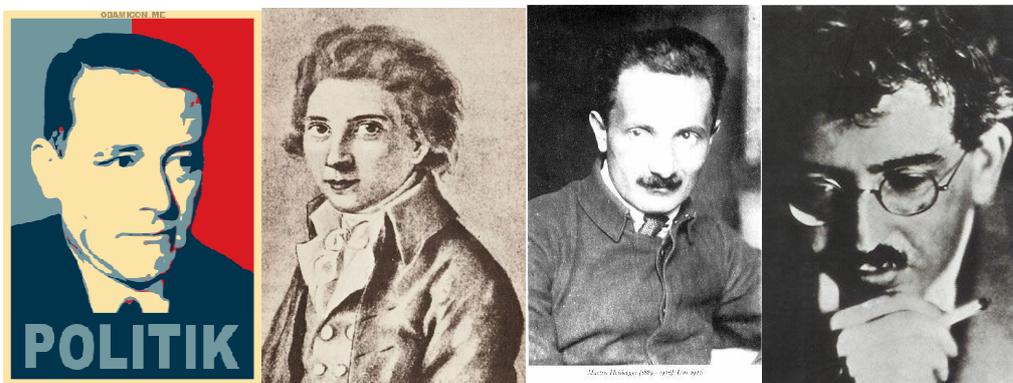


今日の話に出てくる人



カール・シュミット (1888~1985) フリードリヒ・シュレーゲル (1772~1829) マルティン・ハイデガー (1889~1976) ヴァルター・ベンヤミン (1892~1940)

1 ロマン主義、ドイツロマン主義について

- ・ ロマン主義とは何か？

反啓蒙、反合理?? ナショナリズム? 全体主義?

—複数のロマン主義 (A・O・ラヴジョイ)

- ・ ロマン的なもの

中世の騎士物語・伝説 普遍文化に対する地方文化

- ・ シラーの古代／近代

調和する古代と無限をめざす近代 参考資料1

素朴と情感という二つの原理

- ・ 無限への憧憬

ロマン的対象による触発と無限の憧憬 『青い花』(ノヴァーリス) 「ディオティーマ」(ヘルダーリン)

- 無限の種類
- ・ 理念と現実
 - ・ 食欲
 - ・ 多様性と豊穡さ

- ・ フリードリヒ・シュレーゲル

『アテネウム』と社交の輪

フィヒテの知識学 フランス革命 ゲーテの『マイスター』

イロニー 明白だと思われたもの見かけが破壊されて、本当のことがあきらかになる。

ソクラテスの無知のふり ソフィストの知の破壊

『マイスター』に漂うイロニーの精神

ベンヤミン 近代的な批評の自立を達成と評価 『ドイツロマン主義における芸術批評の概念』

2 シュミットのロマン主義批判

1 『政治的ロマン主義』1919

- ・ 現実からの逃避

ロマン主義世代の可能性と現実の葛藤 可能性への逃避

ロマン的対象の意味

- ・ 対象を「機会」として利用

「絶対的自我」(フィヒテ)と「機会原因論」的思考

現実の壁と「高次の第三者」 すべては「高次の第三者」—例えば「共同体」—のための「契機」

運命劇における「運命」 物音などささいなきっかけ(「機会」)が運命という真の原因を発動させる。

- ・ 結局、出くわすものに「お伴」する

絶対的自我であり得ないがゆえの「お伴」

事の進展を「身をともにして考えながら追っていく」という姿勢

ロマン主義に政治的決定はない。「反革命」の政治との違い。

2 ロマン主義批判の意義

決断のない永遠の対話の批判 —— 議会制批判へ

「現実」というカテゴリーの優位 「無限」の「可能性」に溺れるのは駄目である。

ドン・キホーテ的、ロマン的決断

3 シュミットの決断思想

例外状態において決定するもの 現実の実体としての国家

議会主義の永遠の対話を切り捨てる 独裁の可能性と全体国家 友／敵の現実

4 レーヴィットのシュミット批判 シュミットの決断主義は機会原因論的である。

シュミットの決断主義 決然たることへの決断

シュミットの決断における「なんのために」の欠如 現実という決定因に随伴する決断

ヴェーバー 何が価値かの決断と討論

「私はこれでしかあり得ない」という価値を引き受けての 討論

3 「決断」の検討

ケストナーとベンヤミン

ケストナー：『飛ぶ教室』などの児童文学で有名、詩人でもあった

小説『ファービアン』1931 経済恐慌、道徳頹廢、仮面都市、失意自殺

理想をめぐる三類型

- ・ 純粋な理想の信仰者 ファービアンの友人
 - 啓蒙／革命的理想、プチブルの組織とプロレタリアートとの連帯模索
- ・ 純粋な理想の嘲笑者 一般のシニシズム
 - 「間違った組織の中では、間違った尺度が正しいのだから、どうしようとも思わない」
- ・ 純粋な理想の不可能性を知る者 ファービアン
 - イデオロギー的決断は避けるが、シニシズムには違和感を覚える「モラリスト」
 - 人間が本当に理性的になったら楽園ができるかも？それを観察中。

「純粋さ」という空っぽな容器を愛でるイロニー 感傷的気分にこびをうる商人

「純化」：現実的闘争 ミヒャエル・コールハース

ゼネスト肯定の決断 『暴力批判論』1921

デリダのベンヤミン批判 正義へと無限に開かれていることを引き受ける。

3 ハイデガーと決断

有限性を引き受けることの覚悟（自由という理念ではなく）

レヴィナス 存在の重荷から離脱する自由 その決断 「逃走論」